

平成 29 年度 第 2 回 昭島市民図書館協議会
(兼第 1 回子ども読書活動推進計画評価等会議)
会議録 (要旨)

[開催日時] 平成 29 年 11 月 2 日 (木) 18:30～19:40

[開催場所] 昭島市民図書館 2 階 閲覧室

[出席者]

- 1 委員：真如会長、原田副会長、美坐委員、吉野委員、
大串委員、本多委員、山川委員、大野委員
- 2 事務局：石川市民図書館長、磯村新図書館担当課長、井上係長、小澤係長

[欠席者] 新井委員

[議事要旨]

- 1 開会
- 2 会長あいさつ
- 3 議題
 - (1) 平成 29 年度事業の進捗状況及び予定について
 - (2) 第三次昭島市子ども読書活動推進計画の進捗状況について
 - (3) その他
- 4 その他

[配布資料]

- 資料 1 平成 29 年度事業の進捗状況及び予定について
- 資料 2 子ども読書活動推進計画の進捗状況について
- 資料 3 昭島子どもの読書について講演レジュメ
(昭和女子大学名誉教授 大串夏身)
- 資料 4 昭島市読書活動推進研究会レジュメ
(学校図書館アドバイザー 五十嵐絹子)

[発言要旨]

5 議題

(1) 平成 29 年度事業の進捗状況及び予定について

事務局 ※資料 1 の説明

会長 意見はあるか。

委員 意見なし

会長 次の議題に移る。

(2) 第三次昭島市子ども読書活動推進計画の進捗状況について

事務局 ※資料 2 の説明

会長 資料 3 の説明を大串委員より、次に、学校支援をしている吉野委員にお話を
していただき、その後、ご意見ご質問を伺う。

委員 3 ページ。読書の重要性に対する認識・再認識はいつ頃からはじまったのか。

特に情報化との兼ね合い、これからの社会で生きる人を育てるためにも、本を
読むことは非常に重要だという認識と、特に 0 歳児から 3 歳児までは、人間と
しての基礎が作られる時期であり、この時期に言葉を覚える、コミュニケーシ
ョン力をつける、地域の様々な社会の中にある感情を身に付けるなどのために
は、絵本を仲立ちとした働きかけ、読み聞かせなどが有効だという認識は、既
に 1980 年代の後半から英米をはじめ、諸外国にはあり、行政的な取り組みも既
に始まっていた。

しかし、我が国はそうではなかった。日本は取り組みが遅れたということは知
っておいていただいたほうがいい。日本はようやく 2000 年に議員連盟の後押し
で国際子ども図書館を作り、「子どもの読書推進法」を作った。

4 ページにあるように、それ以前に諸外国では国として取り組んでいた。

フィンランドでは図書館の司書を国が集め、読書の重要性と読み聞かせなどの
技能の習得を行ない、地域に戻し、図書館から地域に働きかけをした。

公共図書館の充実を図り、国民一人当たりの貸出冊数は 23 冊まできている。我
が国は 5 冊。10 年ほど前に女性の担当課長が来日し「フィンランドでの課題は、
家庭で男が読み聞かせをすることをすすめることだ」とおっしゃって帰られた。

5 ページ。新しい時代にふさわしい人材を育むということで、本を読むことが
重要であるということをお話した。

9 ページから 12 ページにかけては、本を読むということはどういうことなのか、
本を読むとどのようないいことがあるのか、本を読むことは行政的に、社会に
対してどのようなプラスの要素をもたらすのか、読むだけではなく、本そのも
の良さについても丁寧にお話した。

13、14 ページは本を読むことへの視点。日本では発達段階に合わせた読書は取り組んでいる。物語を読むということにすごく力点が置かれ、読むという行為からみた視点が欠けている。知識を得るための読書、調べることを主体的にすすめるための読書、精神的に社会的な経験を広げる読書など。

社会的な経験を広げるための読書で、たとえば、どういったことがテーマになるかという点、日本では非常に大きな問題になっている「いじめ」、それから差別、環境問題。日本では被爆の問題もあり、そのような問題を図書館や親が取り組みを考え、きちんと子どもたちに読むことを薦める。

15、16 ページは本とSNS、ネットワーク上の情報の問題。

諸外国に比べ、日本では親に対する情報倫理教育が決定的に欠けている。

十数年前にアメリカの地域の図書館で見たが、子ども室にもパソコン端末が並んでいる。まず親が子どもに「インターネットはこういうものなのだ」ときちんと教えなくてはいけない、という趣旨のことを書いたパンフレットが置かれていた。

図書館は、親に対する情報倫理教育を行うべきである。

インターネットと本の違いだが、インターネットは怪しげな情報が多い。

たとえば「ウィキペディア」というみんなが作る辞書がある。何年か前にウィキペディアの創始者が来日し講演されたが「インターネットのウィキペディアは当てにならない。何故かという自分のページには嘘が書いてある」とおっしゃった。既にSNSが暴走する社会になってしまっているから、情報や知識を主体的に判断する力を一人ひとりが身に付けていかなければならない。

そういった点で、本をきちんと読むということがまず大切。本にもよい本、悪い本がある。私が最初に出した本は悪い本の典型で、誤植がたくさんあるとか図案がいい加減だとか、デザイナーが入っていないためにすごく読みにくい。

本を開いてみて、たとえば絵本などを見ていただくと、気持ちのいい、悪いというのはある。色は綺麗かそうではないか。デザイナーが入り、手間暇をかけて作っている本は発色がすごく綺麗だし、開いたときの感じもいい。人間の気持ちを掻き立てるいい本である。だからいい本を皆さんに薦めていただくのが図書館の役割。では本はどう作られているのか。本には、一般の方に読んでいただく本と、大学生などがテキストとして読む本がある。ここでは、一般の方が読む本はどう作られているのかをお話した。本は非常に手間暇かけて作られている。たとえば、私がある本を作ったときに、共著者が何人かいたが、ある共著者から「おろさせてくれ」という申し出があった。なぜか聞いたところ、「400字詰めで30枚の原稿を出したが、400箇所も校正が入った。これは自分の文章ではない」ということだったが、それは当たり前。大手出版社には審査部があり、一般の方に読んでいただくために、文章や事実関係にも全てチェックをか

ける。そして3ヶ月後にやっと著者に校正が送られ、嘖然とすることもある。芥川賞や直木賞をとる小説も然り。新潮社に、佐藤さんという直木賞をとらせることで有名な編集者がいらっしゃるが、その方は直木賞をとる作品にも相当手を入れる。そうやって作るのが本である。

辞書はもっと手を入れている。私もある辞書をお手伝いしたが、最後に出版社から分厚い包みが送られてきて、開けてみると「問題のある記述らしい。あなたは図書館員なので調べてくれ」と。70項目あった。全部根拠を文献など調べ、はっきりしていれば載せ、そうでなければ落とした。

そのように作っている。本は人間が作ったものとして、信頼が置けるものが多い。もちろん嘘の本もある。たとえば厚生省がチェックをかけている医療健康関係、HOW TO 本は、法律に基づき「この本は駄目だ」と広告を出し、販売をさし止めにする本もある。

日本では、出版社は5000社ある。そのうち大手出版社が出す本は初刷り5000部、それ以外の中小出版社は2000部。2000部を店頭に出し1000部しか売れない。残りは全て返本。その1000部のうち500部を裁断し、残りの500部を5年から10年で売るとするのが中小出版社。それでよく経営が成り立つと思う。日本の大手出版社は30から50社ほどで、他の中小出版社、4950社は大体そういうかたち。

絵本でもまず2000部刷り、1000部が売れて、後の1000部を抱え込んでしまう。日本は文化国家ではないので、出版社の在庫には全部税金がかかる。出版社としてはやりきれないから、せっかく作った本を涙ながらに裁断する。

ところがインターネットは全然チェックが入らない。だから誤植や根拠のはっきりしない記述が非常に多い。イギリスのEU離脱の際に問題になったが、嘘のデジタル新聞が結構あり、やはりチェックが入っていないということで信頼度が非常に低い。そういったことを主体的に判断するには、本を読んで、何が正しいのか、どういうものがきちんとしたものなのか、そうでないものはどういうものなのか、情報モラルを理解してからインターネットに触れていただくということが必要である。

19ページ。地域で取り組む意義についての話もさせていただいた。

この講演はアンケートを拝見したところ好評だったようだ。

それから、国際図書館連盟は学校図書館、公共図書館のガイドラインを出しており、ボランティアの項目もあるが、オランダでは、50歳以上の方に対し、学校、図書館など地域での読み聞かせのボランティアをするという働きかけを、国を挙げて行なっている。アメリカ、イギリス、北欧の諸国では、病院で妊婦に、子どもの読書の重要性について働きかけている。そのようなことを日本も考えるべき。日本は絵本の発行部数が少ない。スペインでは、書店で手に入る

本は日本と同じ位で 70000 冊から 80000 冊、日本の場合、児童書の概念に入るのは 4000 冊。スペインは 15000 冊。日本の子ども向けの本は、参考図書も含め 6000 冊。なぜなら書き手が育っていないから。英米などでは書き手を育てることを大学でもやっている。ノーベル賞をとったカズオ・イシグロ氏は大学院で小説の書き方を学んだそう。日本では子ども向けの本の書き方を学科として教えているのは白百合女子大くらい。もっといろいろなところで教えたい。去年から、国際子ども図書館で子どもの本の書き手を育てる講座を始めた。地域のなかでもいろいろとやっていただく必要がある。

会 長 吉野委員お願いします。

委 員 現在市内 3ヶ所の小学校で図書館支援員として、図書館業務、読み聞かせやストーリーテリングなどをさせていただいている。地域の小学校の朝読書の読み聞かせボランティアにはお母さんが多かったが、読んでから仕事に行くというお父さん方もいらした。そこでも読み聞かせをさせていただいて、1年生の始めの頃には、「かいじゅうたちのいるところ」など短いお話を読んでいたが、この頃は「ジャックと豆の木」などの長いお話も聞けるようになってきて、読み聞かせを続けていたことで、子どもたちに聞く力がついてきたのかなと感じている。先日、小学校の図書館に、黒いワンピースに大きな赤いリボンをつけて行ったら、子どもに「今日はハロウィンだから、キキになったのね」と言われた。キキも魔女の宅急便もわからない子どももいたが、楽しんでくれて、私は楽しい図書館にしようと心がけている。

子どもを育てていた頃の、子どもと本について考える。

私は 1970年代に子どもを 3人育てており、その頃は「読み聞かせ」という言葉はなかったと思うが、第1子には寝かしつけをしながら本を読ませていた。長女はすごく本が好きになり「子どもの友」がボロボロになるまで夢中になって読んでいたが、2人目3人目にはあまり読まなかった。

相変わらず本は買って家に本がたくさんあったが、読むことがなかった。実体験として、親が子どもに読み聞かせをするとその子どもは読むようになり、読み聞かせをせずに育てた子どもは家に本がたくさんあっても読まないという結果が出てしまった。

学校の様子としては、市内どこの小学校でも読み聞かせのお母さんが入っているようだ。そして子どもたちは自分の読んだ本を読書の記録としてタイトルや著者などを書いているようだった。

都内区立の小学校でも、ボランティアのお母さん方によって読み聞かせをされているようだし、子どもたちも読書の記録をつけているようだったが、ある区の小学校の図書はデータベース化されていなかった。本もすごく少ないということで、夏休みの宿題などは読書感想文が出るそうだ。1、2年生で 400 字詰

めの原稿用紙2枚、3年生で3枚出されるので、それにより子どもが読書嫌いになるという場合もあると聞いている。昭島ではおすすめの本をリストでいただいて、読んだ本を記録で出せばよく、感想文はないようだった。

2年後、新しい図書館ができれば子供のコーナーが充実すると思うが、学校でボランティアをするお母さんたちが利用しやすく、読み聞かせの参考になるような本を期待している。

会 長 7月7日の大串委員の講演がすごく良くて、教員、学校図書館に関わっている者にはこういった機会がたくさんあるといいなと思う。また、お話にあったようにどの学校にも支援員が入ってくれていて、市教委より週1回程度派遣されているが、それでは足りないので各学校がいろいろ工夫しながら支援員に入ってもらっているが、やはり図書室に大人がいるという良さ、それが各学校で読書活動を進める成果になっていると思う。そんななか、本多委員にもとてもお力添えをいただいているが、いかがでしょう。

委 員 大串委員よりお話があった本の初版部数と、子どもの本の書き手がいない、ということについて簡単にお話ししたい。

僕の本の場合、来月初め頃に河出書房新社より、昭島のこともたくさん書いたエッセイ集が発売される。それは6000部でとても多い。もし10000部売れたら今はベストセラー。20000部売れたら大ベストセラー。実は、僕はそれを狙っている。また再版されてもっと売れるように。

なぜ本が売れないのか。読まないのか。答えは出ている。親が読まないから。インターネットのせいにしたりするが、親が漢字を読めなかったり、普段の日常会話の中で言葉が壊れているので、本を読んでいないのが露骨にはっきり分かる。そうしたら子どもは無理。絶対読まない。吉野委員と同様、僕も読み聞かせをやるべきだと思う。

そのような社会風潮なので書き手がいない。僕らのような「もうそろそろ辞めよう」というところに仕事がある。絵本も同様。ちょっとよろしくない。本屋はどうしているかというと、特に絵本の出版社の場合だが、売れる絵本は決まっています、キャラクターに準ずるような少し教育的な色の付いた、あるいは、教育とまではいかなくとも、知識が少し増えそうなものなら2000部3000部売れる。書店をご覧になればわかると思うが「スーホの白い馬」や「おおきなかぶ」「てぶくろ」などのレベルの本は置いていない。今あるのは前述したものばかり。それらは役にも立たないし、子どもがただ面白がって、絵柄、マンガと見て見ている。学校で既に教わっていることだから、教育っぽい内容のものなんて子どもの身に付いていない。すごく子どもをなめた本の作り方をしていると思う。どことは言わないが、日本のほとんどの絵本の出版社は儲けなくてはならないから、そのような本ばかり作っている。

インターネットは二次情報だから、壊れているのは普通に考えれば分かることだが、その普通も考えない。裏も元もないから、僕らはよほど注意しないとイケない。作り手がいないから作り手を育てるのは賛成。でも作り手がまともに真面目に考えても、出版社がそれを受け入れない。なぜなら儲からないから。そこに尽きる。図書館の重要性は、いや増すすごさがある。今ある本のなかにお宝があるから出来ればリサイクルに出さないでほしい。僕も行ってもらってくるけれど、これ出しちゃっていいのかなと思うこともある。汚れたから出してしまおうというのはやめたほうがいいと思う。特に子どもの本は極端に少ない。たくさんあった方がいい。

また、「読書環境を作りましょう」と言ってもできる人はほんの一部だから、図書館と学校が頑張らないと。

委員 初版が 5000 部以上はやはりビジネスである。日本の出版を支えてきているのはある部分では中小出版社。志のある出版社。中小出版社は長時間労働で、ブラック企業そのもので夜遅くまで「こういう本を出したい」と頑張っている編集者がたくさんいる。心配りしてそういったところの本を図書館が買ってくれない。

委員 図書館もそうだし、昭島の書店にない。

委員 やはりアメリカのように、全国の図書館が買わないと育たない。

委員 アメリカは図書館として中小出版社の本を買って、バラエティに富んだ運営をされているということか。その予算は日本と比べると相当違うのか。

委員 図書館の規模が全然違う。アメリカだと、ここの図書館は分館レベル。巨大な図書館はいくらでもある。ボストンは 80 万人の人口で、7階建ての巨大な図書館。図書館ツアーと市役所ツアーが必ずあり、図書館ツアーは建国時代の古い美しい本を見せる。すると子どもたちは感動する。ヨーロッパだと、もっと古い美しい本を見せ「これらが私たちの前の世代が作った知的な素晴らしい本だよ」と言うと、我々も感動するが子どもたちも感動する。だから日本の図書館ツアーはちょっと貧弱。図書館のお宝を見せないと。日本の文化にはいいものがたくさんある。図書館もそうしたものを所蔵しているところがあるが、あまり見せない。それはまずい。日本人が、図書館に対する尊敬度が低いのはそういうところもある。コレクションが素晴らしいということがなかなか伝わっていない。子どもの本も、ツアーの時にいい本を見せて「素晴らしい本があるよ」と親が言えば子どもは素直だからそう思う。ニューヨークの市立図書館でも寄付がとても多い。イベントなどはボランティアと企業の寄付。図書館はほとんどお金をかけていない。ニューヨークの市立図書館の副館長が来日した際もお金集めに忙しかった。都立図書館はオーストラリアのある州と姉妹都市をしているが、あちらの館長が来て「お金をくれる企業を紹介して下さい」と頼んだ

と聞いている。日本企業の中でもターゲットがあり、海外に工場がある会社に向向き「日本から来た社員は我々が世話をするからお金をくれ」「我々にはこんなにいいコレクションがあるからコマーシャルに使ってくれ」と。もちろんお金は取るがそういうのはたらしかけをしている。

何代か前の茨城県立の館長は企業を回り、子どものためのボランティア講座、読み聞かせなどを行うために「ボランティアを育てるために寄付を」と回ったこともあった。茨城県立図書館は、読み聞かせ講座のボランティアは上級、中級、初級と3段階作っている。それは企業からお金を出してもらっている。「子どもを育てる」ということになると出資する企業がある。

委員 アメリカでは寄付には2種類ある。一つは企業などから。もう一つは、5ドル10ドルの小切手を切って勝手に図書館の口座に入れてしまう。

結構それは大きくて、財政的には潤っている。図書館は本をリサイクルではなく売る。毎週土曜日にいろいろなイベントを行い、前にも話したが、本当に楽しくて、これが図書館とどうつながるのだろうかと思うが、狙いは明らか。カリフォルニアではメキシコ風のラテンの音楽会などを催す。南はほぼメキシコなのでラテンになってしまう。入場料を払えとは書いていないが、5ドル10ドルがたくさん集まる。タコス売り、音楽をかけ、図書館員が「いい音楽でしょう」と言うと、客はお金を入れていく。場所代を取り、図書館の収入になる。それで成り立っている。あえて言えば「図書館の何処どこのコーナーに行ってください。ラテンの歴史書があります」と、とてもわざとらしくくつついているが、それが図書館の啓蒙となっている。

会長 「本なんか読んでいないで勉強しなさい」と言われて育ってきている日本人がまだまだいるわけで、脱却しつつあるが、世の中の事情がそのように変わっていろいろ厳しい状況である。新しい図書館ができるので期待している。

委員 図書館でも地元の農産物を売るところもある。図書館で朝市をやるとみんな寄って行く。

会長 他に意見はあるか。

委員 皆さんのお話を伺いながら、そうだと思う部分が数多くあった。

私は高校で学校司書として仕事をしてきた。必ず図書館は開けてやってきた。

1年間だけだったが中高一貫の学校で司書をしたときに、中学生が「僕の友達の中学校は図書館が開いていない。ここは開いていてよかった。だからここに来た」と言っていた。他の子も言っていた。週1回開けるだけ、たまたま行ったときに閉まっていると、その子にとっては1ヶ月に1回、初めて行った図書館かもしれないし、いつも閉まっている図書館という印象がついてしまう。「行っても閉まっている」というのがっかり、そういう思いをさせてはいけないというも思っていた。その地域の子は、小学校は開いているが中学校は閉まってい

ると言っていた。

やはり図書館は開いていなければいけない。予算のこともあるのもわかるが、それを乗り越えていくのが学校と図書館の連携ではないか。学校でいくら言っても駄目だし、公共図書館の助けもあって、そのうえで資料も多くなるし、運営が出来ていくのかなというところに私は期待をして仕事をしてきた。新しい図書館が出来るのはいい機会。学校への働きかけ、朝市の話、ボランティアの読み聞かせの話、出版の話など、私も見聞きしてきたことだが、そういうことがこの場で話し合えているということにとっても心強く思った。退職し、やり残したことがとても多くてがっかりしていたが、この会に入れて、お話を伺えたことが私にとって、もしかしたら生き甲斐になるかもしれないと思った。

委員 私は以前、西東京市の図書館に勤務していたが、そこにも子ども読書活動推進計画があったが、その委員は全員女性で立ち入り難かったが、男性もいろいろなことに参加していくべきだと感じた。

4 その他

事務局 新図書館について。先日、工事の入札が終わり無事落札された。

議会でも承認を得、これから着工となる。竣工は平成 31 年 12 月なので 2 年かかるが、新館の建物は 1 年ほどでかたちになり、線路からも見えてくるのでだんだん楽しみになると思う。皆さんご興味のある児童のスペースだが、靴を脱いで上がれるところにおはなし室を設け、細長い場所に木製の丸いちゃぶ台をいくつか置こうと考えている。これは親子や読み聞かせの方と近寄ったり離れたり向かい合ったり、距離を自由に作っていただくため。友好都市である岩泉町の木材を使って作ろうかと考えている。

今の図書館で圧倒的に少ない中高生のスペースについては、新館では勉強できるスペースも確保できるし、グループ学習室でラーニングコモンを取り入れながら調べ学習もできる。各年代の方に便利に使って楽しんでいただけることを考えている。

これからも折に触れて進捗状況をお伝えしていきたい。

事務局 今後の予定の説明

以上